



日本記者クラブ

2013年度日本記者クラブ賞・同特別賞
受賞記念講演会

2013年6月12日

日本記者クラブ賞

小山鉄郎・共同通信社編集委員兼論説委員

同 特別賞

山本美香氏

佐藤和孝・ジャパンプレス代表

【贈賞の理由 受賞者の紹介】

■日本記者クラブ賞 小山鉄郎（こやま・てつろう）共同通信社編集委員兼論説委員

小山鉄郎記者は文芸記者として、日本文学を切り開く作家、文学者たちを幅広く取材してきた。安部公房、中上健次ら多くの作家とインタビューし、生の声を伝えた。中でも、村上春樹については1985年から、次代の日本文学を担う作家として着目し、追い続けてきた。村上にはあまりインタビューを受けず、自作を解説しないことで知られるが、小山記者は繰り返しインタビューしている。世界的人気作家となった村上春樹の世界と物語を生み出す力を、村上自身の言葉の中から引き出した。村上文学が目指しているものを読み解き、村上作品と近代日本社会との関係性を解き明かす活動は文芸報道の可能性を示したものだといえる。また、2002年からは「漢字の世界」にも取り組んでいる。漢字の大家・白川静に「入門」し、漢字の成り立ちの基礎を学び、白川が亡くなった後もその遺志を受け止め、難解な漢字の仕組みを小中学生でも分かるように解説する連載や著作を発表している。連載記事をもとに刊行した『白川静さんに学ぶ 漢字は楽しい』はベストセラーとなった。一見とっつきにくい現代文学や文字学の作家や学者に直接取材し、読者への「橋渡し」に取り組んだ小山記者の活動は新しい文芸ジャーナリズムを切り開いたものとして、日本記者クラブ賞にふさわしいと評価された。

＜経歴＞1949年5月群馬県生まれ。64歳。一橋大学卒。73年共同通信社入社。84年から文化部、現在は編集委員室編集委員兼論説委員。85年から村上春樹を取材。2008年3月から1年間「風の歌 村上春樹の物語世界」の連載を手掛け、10年に『村上春樹を読みつくす』（講談社現代新書）を刊行した。漢字学関係では03年から「白川静さんに学ぶ 漢字は楽しい」を連載。06年に連載をもとに書き下ろした『白川静さんに学ぶ 漢字は楽しい』（共同通信社）が10万部を超えるベストセラーとなる。続編の07年刊『白川静さんに学ぶ 漢字は怖い』（同）とともに新潮文庫になり、『漢字は楽しい』は10年夏の「新潮文庫の100冊」にも選ばれた。他に『白川静 文字学入門 なるほど漢字物語』（共同通信社 12年）『あのとき、文学があったー「文学者追跡」完全版』（論創社 13年3月）などがある。

■日本記者クラブ賞特別賞 山本美香（やまもと・みか）氏 ジャパンプレス所属

2012年8月20日、シリア北部アレッポで、内戦取材中、政府軍の銃弾を受けて死亡したジャーナリスト山本美香さんは長年アフガニスタン、シリア、イラクなどの紛争地や大規模被災地に危険を冒して入り、取材活動を行ってきた。戦争という極限状態の現場にあっても、取材の対象はその状況下で苦しむ女性や子どもたちにも向けられた。たとえば、タリバン政権下で抑圧され自由を奪われた女性たちの姿を優しい目線でカメラにおさめ、ありのままの姿を世界に伝えた。戦場取材の長い経験をもつ代表的な女性ジャーナリストであり、戦争の不条理で苛酷な実態を女性や子どもの視点でとらえた報道は、テレビニュース、写真、記事、書籍など様々なメディアで発信され、視聴者と読者の理解を深めた。困難な条件があっても現場にかけつけ、当事者に会おうとした山本さんの取材は若いジャーナリストやジャーナリズムを目指す若者たちに大きなインパクトを与えている。最後まで現場から報道し続けた山本さんの記者活動は、日本記者クラブ賞特別賞にふさわしいと高く評価された。

＜経歴＞1967年5月北海道生まれ、山梨県都留市で育つ。都留文科大学卒。90年朝日ニュースター入社。報道記者として雲仙普賢岳などを取材。95年フリーランスに。アジアプレスを経て、独立系通信社ジャパンプレスに所属。2001年アフガニスタン取材中に9.11米同時多発テロ事件発生。アフガン空爆下のカブール陥落を取材した。03年イラク戦争勃発を受け空爆下のバグダッドに入る。このイラク戦争取材でジャパンプレス代表・佐藤和孝氏とともにボーン・上田記念国際記者賞特別賞を受賞。12年8月20日シリア内戦取材中、シリア北部アレッポで政府軍の銃弾を受けて死亡（享年45）。著書に『ぼくの村は戦場だった。』（マガジンハウス 06年）、『戦争を取材する 子どもたちは何を体験したのか』（講談社 11年）『山本美香最終講義 ザ・ミッション 戦場からの問い』（早稲田大学出版部 13年4月）がある。

■日本記者クラブ会報6月号「受賞のことば」<http://www.jnpc.or.jp/files/2013/06/jnpc-b-201306.pdf>

司会 中井良則・日本記者クラブ専務理事
2013年の日本記者クラブ賞、日本記者クラブ賞特別賞の受賞記念講演会を始めます。最初に日本記者クラブとクラブ賞について説明いたします。

日本記者クラブというと、「記者クラブ」の総元締めではないかと思われている方が多いと思います。「記者クラブ」というのは、役所の中の部屋を「記者クラブ」と称して、そこに新聞とかテレビの記者が詰めているところです。われわれ日本記者クラブの場合はそうではありません。新聞社、テレビ局、通信社が会費を納めて、自分たちでつくった組織なのです。1969年に発足して、現在、メディア全部で126社が会員になっています。それと法人賛助会員という、企業で賛助会員になっているところが63社あります。全部で約2,500人の個人会員がおります。政府からの援助などは一切なくて、メディアが自分たちのお金でこういう組織をつくり、独立した非営利の民間の組織として活動しています。

何をやっているかということ、記者会見を組織することです。例えば、去年、衆議院選挙の前に11党の党首討論会を開催しました。

「日本記者クラブ賞」は、クラブの加盟社の新聞、放送、通信社で働いている記者たちを顕彰しています。日本記者クラブ賞特別賞は昨年からはじめました。クラブの非会員のフリーの人やいろいろなチームの方々を顕彰しています。

今年の日本記者クラブ賞は共同通信の小山鉄郎さんです。同特別賞は昨年シリアで取材中に亡くなった山本美香さんです。

きょうは、小山さんと、山本美香さんが所属していましたジャパンプレスの代表でジャーナリストの佐藤和孝さんのお二人にお話をさせていただきます。

まず小山さんからお願いします。

小山鉄郎・共同通信社編集委員兼論説委員
こんばんは。共同通信の小山鉄郎です。よろしくお願いします。

文芸記者としては初めてのこの賞の受賞と

いうことなので、文芸記者という職業はどういうものかということのを少しだけ最初に話して、それから受賞対象となった村上春樹さんのこと、さらに漢字学者で文学者の白川静さんのことを話したいと思います。

僕らは日ごろ文学者たちを取材しているわけですが、僕らの取材対象の中に文芸評論家という職業の方がおられます。僕も評論に近いようなことを書くので、僕の書いている評論的な文章と文芸評論家の方の書いている評論、そういうものが少し似通っていて、僕、小山の書いているものが評論家的な仕事の延長線上にあるのではないかと思われている方もいらっしゃるかもしれません。その点についてだけ、ちょっと話しておきたいと思います。

文芸記者は文学者と会うことに情熱を注ぐ

文芸記者と文芸評論家というのは、実は異なる仕事だというふうに僕は思っています。どっちがいいとか、そういうことではありません。とても尊敬している、敬愛している文芸評論家の方も何人もいらっしゃるのですが、いいか悪いかではないのですが、職業上異なる仕事だと思っています。つまり文芸記者というのは、文学者に会うことに、とても情熱を持っていて、そのことに最も力を傾けているという職業なのです。「会いたい」と思うことに。

取材を申し込んで、よく断られたりもするんですが、たとえ断られても、会いたいという気持ちを常に維持して、「いつか会おう」「いつか会いたい」というふうに思っている職業です。

自分の経験で言うと、僕は1984年に社会部の新宿署回りから文化部へ異動になって文芸担当になりました。たしか『荻窪風土記』がもう出ていて、井伏鱒二さんにお手紙を書いて、お会いしたいとお願いしました。でも断れて、その後も断られました。たぶん、3回か4回は断られていて、申し込みは手紙で出すのですけれども、そうするとお返事がはがきで来るのです。直筆の。そのうち、断られるのも悪くはないなと思って。何しろ太宰治の先生ですからね。太宰の先生から直筆のはがきが来る、何通もたま

っていくという…。

それで、僕が井伏さんにインタビューができたのは7年後、91年の6月です。たぶん、こういうことは確かにはわかりませんが、僕のインタビューが記者としては最後か、またはそれに近い取材でした。井伏鱒二さんはその2年後ぐらいに亡くなっているのではないかと思います。こういう席で不正確なことをしゃべるのはよくないのですが。

そういうふうに、会おうとすることにすごく情熱を持っている職業が文芸記者です。これはほかのセクションの記者も全く同じだと思うのですけれども。会って、その場で聞いて、でもそのことをそのまま書くわけではありません。むしろ相手が言いよんだり、否定したり、またはしゃべらなかつたりするのですが、場合によってはしゃべられたことよりも、そういうことのほうが価値を持つことがあります。

つまり、この意味は何かということ現場で考えて、文学者と接触している最中に、視線が変わったとか、そのようなことを考えて活動しているのが文芸記者なのです。別に僕だけではなくて、ここにも文芸記者の方が何人か来ていらっしゃるかもしれませんが、皆さんそういうことをしています。

今からお話しする村上春樹さんの文学、それから白川静さんの文字学の世界、これについて話すつもりですが、もしかすると評論的なことに受け取られるかもしれませんが、実際はそうではなくて、村上さんに繰り返しインタビューをし、白川さんにも繰り返しインタビューというか…、僕は白川さんに弟子入りして漢字を初歩の初歩から教えてもらったものですから何回も会いましたけれども。

そういう中で自分が受け取ったもの、そういうものを記事に書き、本に書いてきました。今からお話しすることも、そういう経験を通しての話であるということをご理解ください。

日本の作家であることに自覚的な村上さん

まず、受賞理由の村上春樹さんの文学の特徴というものを話したいと思います。村上さ

んは、出す本、出す本、全部ベストセラーになって。このあいだ出た『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』も（長いタイトルですねえ）、これが7日目にして100万部。文芸書としては新記録ということだそうですが、とにかく非常にたくさんの読者を持っている方です。僕は85年に村上春樹さんに『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』という作品でインタビューしたのが最初に会った機会でした。その時も、長いタイトルだなと思いましたけれども、今度の『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』は『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』とほぼ同じ長さのタイトルで、村上さんとしては最長級のタイトルをつけたのだなと思いました。

村上さんは、日本だけではなくて、いまや世界中で、新作が出ると、いや、まもなく出るというだけでニュースになり、本が出版されるとすぐ翻訳が出るという世界的な人気作家です。日本人はそれを一番最初に読むことができるのですから、本当に幸せなことだと思っています。

もしかしたら皆さんも思っているでしょうが、記者はこういうところが楽で、村上さんに直接「なぜ世界中で読まれていると思いますか？」と質問することができます。『海辺のカフカ』という長編が出たときに、「日本でベストセラーはわかりますが、世界で売れる理由は自分はどう考えていらっしゃるか」ということを聞きましたら、「自分は日本の作家であることに自覚的だからだと思いますよ」という返事でした。「自分は日本の作家であることに自覚的だからだと思います」。世界で読まれている理由を、そういうふうにおっしゃいました。

ただ、村上さんという人は、あまりべらべら自分のことをしゃべる方ではなくて、ほとんど自分の作品については自己解説をいたしません。あとはご自由にお読みください、どう読んでもいいです、という態度を貫く、本当に希有な作家です。こういう人は、僕が会った中では村上さんだけです。何も説明しない作家の人は。

だから、彼の「日本の作家であることに自覚的だから」ということがどういうことかということを考えていくのは、僕の文芸記者としての

作業で、いまからお話しすることもその延長線上のことです。

確かに、よく考えてみると村上春樹という人はあんなに長く外国に住んでいるのですけれども、すべての長編が基本的には日本を舞台にして書かれています。だから「日本のこと」を村上春樹が考えようとしていることは明らかだと思います。アメリカ人の記者たちから、何でこんなに長くアメリカに住んでいるのにアメリカを舞台にして書かないのだという質問をよく受けるそうです。

生と死が近くにある

きょうは僕の話は 40 分ぐらいでということなので、まずは村上春樹の小説の特徴の一番わかりやすい例として、『ノルウェイの森』の表紙のことからお話しします。この表紙の中に村上春樹の小説の特徴がよくあらわれています。

この『ノルウェイの森』というのは 1987 年に出ました。どういう理由だかわかりませんが、刊行時のインタビューは僕だけでした。村上さんや出版社側のどんな事情があったかわかりませんが、その段階では、まだこの装丁ができていませんでした。後で装丁ができたものを見てみると、非常にシンプルな装丁でびっくりして、「何だろう、この装丁は」というふうに考えたことをよく覚えています。そして、この装丁は村上春樹さん自身がなさったものでした。

その翌年、すなわち 1988 年、村上春樹は『ダンス・ダンス・ダンス』という長編を書きます。この『ダンス・ダンス・ダンス』でもインタビューをしました。『ダンス・ダンス・ダンス』刊行時も『ノルウェイの森』はベストセラーの道をまっしぐらという感じでした。新作『ダンス・ダンス・ダンス』が出ているのですが、まだ『ノルウェイの森』の話題が続いているという状態でした。

それで、『ノルウェイの森』の装丁の話になりました。その時、村上さんはこんなことをおっしゃっていました。「赤と緑の反転以外はないと思ったんです」というふうに村上さんはお

っしゃっていました。

この上巻のほうは赤です。赤の中でも、血のような赤。生命の象徴、生きていくことの象徴だと思います。下巻は深い森の緑です。『ノルウェイの森』という小説には、2 人の特徴的な女性が出てきます。直子という女性が森の中で首を吊って死んでしまいます。ですから、緑色の森の世界は、死の世界。赤の世界は生命の血の色で、命の世界。その「生」と「死」が装丁にあらわれているのです。それをまず理解してほしいと思います。

それで、村上さんが言った「赤と緑の反転しかないと思った」ということは、たぶんこういうことだと思います。『ノルウェイの森』の上巻だけ見ますと、赤い中にタイトルと著者名だけが緑で印刷されています。下巻のほうを見ると、緑の中にタイトルと著者名だけが赤で印刷されています。「赤と緑の反転しかないと思った」、反転の意味は、そのことです。

この長編の中に「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」という言葉があります。『ノルウェイの森』の中では、唯一この言葉だけがゴシックで印刷されています。上下 2 巻の長い小説ですけれども、この言葉だけがゴシック体で書かれています。

上巻をみると、死は緑色です。死は、生の中に、つまり赤い色の中に、対極としてではなく、その一部として存在している、という『ノルウェイの森』の一番キーになる唯一ゴシック体で書かれた言葉が、そのまま装丁になっています。この装丁は、村上さんご自身がなさった装丁ですから、この『ノルウェイの森』の装丁の中に、村上文学の本質が凝縮されているのです。

何が言いたいかというと、「生」と「死」が遠く離れてはいないということです。村上文学は、生と死が含まれ合っている。生と死が非常に近い。それが村上文学の最大の特徴です。

生の世界と死の世界が非常に近い。主人公は生の世界にも生きていますけれども、死の世界とも対話をする、死の世界に入っていく。そこでいろいろな人とお話をする。それでまた生の世界に戻ってくる。そういうふうに生と死がす

ごく近くある。

これが村上文学なのですが、実はこれは村上さんの文学だけではなくて、日本人の大きな特徴だというふうに村上さんは考えています。日本人全体の大きな特徴だと。日本人は平気でお化けと話ができる。幽霊がすぐ近くにいる。死んだ人が、遠くにいるのではなくて、心のすぐ近くにいる。死者といつも話ができる。死者の霊が自分の周りにいつも飛んでいる。そういう中を生きているのが日本人の精神性、日本人のメンタルな世界、心の世界だというふうに村上さんは考えています。

長く話せないのが残念なのですが一例を出すと、『海辺のカフカ』の中に、ケンタッキーフライドチキンのカーネル・サンダーズという人形が、女の子を紹介する客引き役で出てきて、〈いい女性がいますよ〉とか言って誘う話があります。これは人形が歩いてきて、しゃべるのですけれども、日本人は読んでいて全然不思議に思いません。人形が歩いてしゃべっていることを。そこに出てくる登場人物の星野青年というのも、〈そんなにいい人いるんですか？〉とか言って平気で話しています。日本人にはこういうお化け的なものと平気で話してしまう、あまりびっくりしない感覚が実はあるのです。そうではないという人もいるかもしれませんが、そういう世界を村上春樹さんは書いています。

そして『ノルウェイの森』は、直子という森の中で死んでしまう女性の世界と、緑という生命の塊のような女性の間を行き来する「僕」の物語なのですが、直子のところに主人公の「僕」が行って帰ってくると、緑に「幽霊でも見てきたような顔しているわよ」というふうに言われます。すなわち、村上春樹は直子の世界を幽霊の世界、死者の世界というふうにとらえていて、その死者の世界とを、主人公が往復して、また生者の側に戻ってきて、生の象徴のような「緑」と話していくというふうになっています。そういう死者と対話するというのが非常に重要な物語なのです。ほかの作品もそうですけれども、『ノルウェイの森』を読んだ方が一番多いでしょうから、例として話しました。

そして、死者と対話していく中で、村上春樹

のもう一つ際立った特徴があるので、それだけご紹介したい。

「四」という数字へのこだわり

村上春樹には、「四」という数字に対してたいへんなこだわりがあります。『ノルウェイの森』で言うと、直子さんが亡くなって、直子と一緒にサナトリウムに住んでいたレイコさんという女性が東京に僕を訪ねてくる場面があります。レイコさんは直子の服を着てきます。なぜかという、彼女たち2人は服のサイズがほとんど同じなのです。遺言で服をあげると言われたので、レイコさんは直子の服を着て登場します。そうすると、レイコさんが乗ってくる新幹線は、まるでそれは棺桶のような列車だったと書いてあります。棺桶のような列車に乗って、直子の服を着て、僕に会いに来るレイコさんというのは、直子のお化けです。幽霊です。

そのレイコさんと僕が性的な関係を結ぶ場面があるのですが、その日、自分たちは「四回交った」、4回関係したというふうに書いてあります。それも「四」の字が2回も繰り返されていて、これは単に4回ということではなくて、僕は「四回」は「死回」のことで、死者の回数であると思っています。死者と交わる生者というふうに考えているのです。

小山は村上春樹が好きだからそんなふうにしただけなのではないかという人も結構いるのですけれども、そうではなくて、例えば『ねじまき鳥クロニクル』の第3部の中にある、日中戦争での中国人に対する日本人の殺りくを書いた場面にこんなところがあります。

そこでは、文庫本2ページの間に、「四」という数が9回も出てきます。見開きの2ページに9回の「四」が出てきます。これは村上が「四」というものを明らかに意識的に書いている場面です。ここでは、穴は四メートル四方、掘る人は四人、休憩をとるときも四人ずつなのです。

もう一つ、例を挙げましょう。ちょっと短いのですが、これは『ねじまき鳥クロニクル』の第2部の中にあるものなのですが、そこは夢の中で、主人公「僕」が相手と闘って殴る場

面です。この場面で「僕」は「それからかれを殴り、殴り、殴り、殴った」と4回殴っています。村上春樹は同じ動作を4回繰り返すということが非常に多くて、ほかの作品でも、4回こういうことが繰り返されている場面を見つけたら、ちょっと違うことが書いてあるのだなというふうに思ってください。

何が言いたいかというと、死者というものと生者が交わる、死というものがすごく重要である、というのが村上春樹の一つの大きなポイントなのです。『ノルウェイの森』がそうですし、この「四」に対するこだわりがそうです。

では、それをこだわって、何を村上春樹は言いたいのか、それだけをここでお伝えしたい。そのためにしゃべっているのですけれども。

大切なものを失って成長する主人公たち

やはり『ノルウェイの森』で話すとわかりやすいかなと思います。前に紹介した「レイコさん」は直子の霊魂だと思っています。つまり「レイコさん」「レイコン」「霊魂」だと思っているのですが、そのレイコさんが「もっと成長して大人にならさい」と言います。要するに、死者のことを一生懸命考える、そのことによって成長しなさいと言っているのです。村上春樹の小説は、すべて人間の成長を書いた小説です。人間が何かの体験を通して成長していくということを書いています。特に死者と交わって、死者のことを考えて成長していくということだけを書いているといってもいいです。そういう作品です。死者または切実な感情と出合って、成長していく物語です。

なぜ死者を考えるということが重要かというと、我々は日常あまり自分の本当の心がよくわかっていません。日常の忙しさとかそういうことで。でも、大切な人を失ったときだけは本当に自分の心がわかるからです。大切なものを失ったときだけ、自分の本当の心がわかるからです。本当の心がわかるということが成長するということなのです。村上春樹は、その一点にすべてを向けて書いていているといってもいいです。

難しく読む必要はありません。村上さんの作

品は確かに仕掛けに富んでいるけれども、一番重要なところは、自分の切実なもの、失われたもの、それは本当に愛する人であったり、または家族であったりする場合もあるし、それからこの『ねじまき鳥クロニクル』で書いたような戦争の死者である場合もあるでしょう。そういうことを考えることで我々はハッとするのは。自分が本当にどういうところを望んでいたのかというのが初めてわかる。そのことによって人間は成長するのです。

いま我々が生きる世界は非常に不完全なものです。もちろん日本もそうだけれども、日本だけではなくて、世界がつくり直されなければいけない。新しいほうに動いていかなければいけない。そういう時代の中を我々が生きていることは間違いないと思います。

そういう我々が、自分の本当の心に気がついてつくり直す力、それはハッとする力、人間が成長していくという力によって世界がつくり直されるのだということを村上は言っているのではないか。それが僕の考えです。村上春樹がいま世界で読まれているのは、そのようなことを書いているからだと思います。彼の書いていることは決して難しい小説ではなくて、そのことがわかって読めば、僕は村上春樹の物語は非常にわかりやすい小説だと思っています。

『海辺のカフカ』が2002年に刊行されました。『海辺のカフカ』というのは、15歳の少年が父親を殺したと思って、家を出ていくのですが、その冒頭のところと結末のところの数行を紹介したいと思います。

冒頭、僕は、行くところは四国に決めていた。「四国でなくてはならないという理由はない」「四国はなぜか僕が向かうべき土地であるように思える」と書いています。

少し死に対するこだわりをしゃべってきたので、この「四国」が本当の単なる「四国」ではないということがおわかりかと思います。これは死の国で、実際に『死国』という映画もあるぐらいです。坂東眞砂子さんの小説、四国遍路が『死国』という映画になっていますけれども、そういうふうに主人公が死の国に向かう、

「四国」（死国）へ向かっていく物語が、『海辺のカフカ』です。

そして、この長編の最後の場面です。その「四国」（死国）を通過して君は成長したんだ、というふうに主人公「僕」は言われます。村上春樹はやはり、死の世界に人間が突入していつていろいろなものを考える。その中から出てきたときに成長している。そういうことを一貫して書いているのです。『ノルウェイの森』もそうですし、『海辺のカフカ』も全くその形になっている。もちろん、四国に、高松へ向かうのですけれども、それは単なる四国ではない。死の国。その死の国がどういう死の国であるかは読んで考えればいい。僕なりの考えはありますが、皆さんがお考えになったらいいいのではないかなと思います。

白川静との意外なつながり

さて、白川静さんも受賞理由になっていて、とても尊敬している漢字学者なので、白川さんについてもお話ししたいと思って、用意してきたのですけれども、もう随分長い時間しゃべってしまったので、あと少しだけですが、お話ししたい。

村上春樹の長編の『アフターダーク』にこんな一場面があります。

『アフターダーク』というのは、マリという女性が独り、深夜を彷徨する話です。ホテルで中国人の娼婦が暴行を受けてけがをして、主人公のマリは中国語を勉強している女子学生だったので、彼女が通訳を務める話です。そのラブホテルの女子マネジャーが、暴行した日本人の男の写真を持っているので、中国人のマフィアに、その犯人の写真を渡す場面があります。

「今でも耳は切るのかい？」と女性マネジャーが言います。中国人の男は「命はひとつしかない。耳は二つある」「そうかもしれないけどさ、ひとつなくなると眼鏡がかけられなくなる」「不便だ」と男は言う。

いかにも村上春樹らしいウィットーな会話です。でも、「今でも耳は切るのかい？」、「命はひとつしかない。耳は二つある」という

意味がちょっとわかりにくいですね。

でもこれは、漢字学のうえで言うと、「取」という字のことです。この2人の会話は、この「取」という字の字形についての会話です。

中国では、戦争があつて、敵を討ち取って、死体を運ぶのは大変ですから、左耳を切り取って、その数で戦功を数えました。賊耳という行為ですけれども、京都の耳塚もそうです。その賊耳の行為をあらわしている会話です。

この2人は賊耳の話をしていることがお互いにわかっています。「今でも耳は切るのかい？」という会話。それから「耳は二つある」。賊耳は左耳しか切りません。なぜ両耳を切らないかということ、両耳だと2人分殺したことになるので、左耳しか切りません。

「取」の右側の「又」という字は手の形です。フォークの形です。ですから、手で耳を切り取っている文字です。

「最」という字も字形内に「取」を含む文字ですが、「最」の古代文字を見てみますと、「取」という文字に袋のようなものを被した字形になっています。つまりたくさん耳を切り過ぎて、もう手で持てなくなって、袋みたいなものに切った耳を入れて持ち歩いているという文字が「最」です。ですからこれは、あまり言葉はよくないですけども、「最高殊勲戦士」というような意味です。

小説の会話に戻ると、「今でも耳は切るのかい？」というのは、いまでも戦争をしますかという意味です。いまでも戦争をしますかという意味がここに書かれているのです。

それで、この小説の暴行した男性の名前は、なんと「白川」というのです。僕は白川静さんのことを書いているのではないかなと思っています。でも、白川静さんの純粋なるファンは、白川さんはそんなに悪い人ではないというふうに言うのですが、そのくらいのことは作家の方はやりかねない。

小説の章は、この白川と中国人の男性が、車を並べて1メートル以内にいる場面で終わっています。ですから、明らかに白川と中国との関係を村上さんは意識して書いていると思います。

それから 1 点だけ。これでおしまいです、白川静さんがまだ有名になる前に、作家の高橋和巳さんが亡くなる直前、2カ月前に『わが解体』という本を書いて、その中で立命館大学の立派なS教授のことを書いています。このS教授は白川静さんのことです。高橋和巳の文章によると、そのS教授（白川静さん）は、夜、こうこうと明かりを灯して、研究をしていたとのこと。

『アフターダーク』の犯人の白川も、1 人自分の仕事場に残り、夜こうこうと明かりを灯して仕事をしている人間です。死の直前の高橋和巳がそれを書いたことは、白川静さんに関するエピソードの中ではとてもよく知られていて、ウィキペディアにも紹介されるぐらいに有名な逸話なのですが、この小説の主人公で中国語を学ぶマリという女の子が親しくなる学生の名前が「高橋」という名前なのです。作中に名字を持った男性は2人しか出てきません。その2人が、なんと「白川」と「高橋」なのです。

これは小山が、白川静さんと村上春樹さんを好きだから、こんなふうに考えてしまうのだろうという人もいるかもしれません。でも、そうでもないのです。もうちょっと話せば、さらに理解してもらえることがたくさんあるのですが、お時間なので、また質問なりがあったらお答えしたいと思います。

司会 次は佐藤さんをお願いします。

佐藤和孝・ジャパンプレス代表 皆さん、こんばんは。ジャパンプレスの佐藤です。本来、山本美香がしゃべるのですが、代理としてここに来ております。

今回は、なぜジャーナリストは戦場に行くのか、ということをお話したいと思います。

戦地取材の意味を問う旅

去年の 11 月にトルコとパリ、ロンドンに行ってきました。去年、世界中でジャーナリスト

の現場での死者数が大体 88～89 人でした。シリアで亡くなった記者の数が 35～6 人。まだ確定はしていませんが。そのぐらいの数の記者が亡くなっています。いま言ったように、一番多いのはシリアです。トルコとパリとロンドンに行ってきたのは、シリアに取材に行っただけがをしたり、また同僚を亡くしたり、また一緒に取材していた夫を亡くしたりした人たちを取材するためでした。

なぜかというと、山本美香が死んでから、この仕事の意味はどこにあるのか、われわれが命をかけてまでやる仕事であるのか、この質問を持ってその3カ国を回ってきました。当然、アポイントメントはとっていますから、山本美香が死んだのも世界中で報道されていて、彼らもよく知っていました。

この取材は日本テレビで「1000 年後に残したい…報道映像」という年末の報道特番でやったものです。そのときにインタビューで使われなかったものがあります。先ほど言ったような質問を取材したジャーナリストたちにぶつけました。

まずトルコのイスタンブールに行きました。アナトリア通信のカメラマンに会いました。40 歳。トルコ人。妻 1 人、7 歳の娘さんが 1 人。彼は 2012 年 7 月、シリアの第 2 の都市のアレッポに入りました。そこで政府軍から狙撃されて、足に被弾して現在もリハビリ中です。かなりの重傷で、まだ足を引きずっている状態でした。彼に、なぜこの仕事をしているのかということをお聞きしてみました。これは彼のインタビューをそのまま言います。

「人々は感じることで生きられると思うのです。現地で起こっていることを、平和な国の人に感じさせることが私の仕事だと思っている。なぜなら、そこで起こっている悲劇を世界が知るべきだから。いろんな人が死んでいて、つらい思いをしていると、世界の人を知るべきだと思う。それを感じたことで、戦争の悲劇が初めてとまるのではないと思う。戦争では女性、子ども、年寄りが犠牲になる。その被害をミニマムにすることが私たちの仕事ではないかと考えている」という彼の仕事に対する思いです。

彼に聞きました。「リハビリ中ですが、またシリアに行きますか」。「もちろん行く」という答えが返ってきました。

今度はパリに飛びました。パリマッチの記者のカロリーヌ・ポワロンさんに会いました。カロリーヌさんの夫はジル・ジャキエさんと言います。二人はわれわれと同じように事実婚でした。ジル・ジャキエは45歳。フランスのテレビ局の報道記者です。アフガニスタン、リビアなど25年以上、そういった戦地の取材をしてきたベテランでした。ジャキエさんは昨年1月、シリアのホムスで政府軍の砲撃を受けて死亡しています。このときにカロリーヌもジルも、自由シリア軍、反政府勢力、反体制派、彼らの同行取材をしていました。反体制派が外国人記者のためにつくったメディアセンターにいるときに、政府軍にねらわれて——これは違いますね。メディアセンターではなくて、ホムスに行ったときに、どこから撃ってきたかわからない砲弾によってジルは死亡しました。

カロリーヌは近くにいたのですが、死の瞬間は見えていませんでした。しかし、すぐそばにいて、1分後にはジルのそばに駆けつけた。そのホムスから首都のダマスカスに彼の遺体をタクシーに入れて運んでいくとき、彼女がどういう思いだったのか、聞いてみました。

「私は恐怖を感じていました。嘆き悲しんでいました。道すがら、すべてを映像として撮影しました。それを忘れたくなかったのです。それを信じたくなかったのです。嘆き悲しんでいました。泣きました。たくさん話したかった。話すのをやめませんでした。嘆き悲しんでいました。彼が死んだと言うことができない。私は彼が死んだと言えなかった。すごく苦しくつらい時間でした。彼の顔が生気を失っていました。複雑だったのです。まるで心臓を持っていかれ、心臓をえぐり取られているように感じました。息が詰まり、話すことができず、泣き叫び、話し、何もなかったかのように撮影を続行し、すべてが同時に行われ、私は嘆き悲しんでいました」

これが夫のジルを運んでいく途中で彼女が思ったことです。

彼女もパリマッチの記者ですから、彼と4年半一緒にそういった戦地を取材して、いつも一緒にいたわけですが、彼女にこの仕事を今後も続けるかどうか質問してみました。

「それは、いま私が自問自答していることです。でも、ええ、続けると思います。これからも続けていくと思います。ただ、シリアには足を踏み入れません。私の夫を殺した政権側が言っていることに反してシリアに再び行くことはありません。行きたくありません。私は仕事を続けますが、別の場所へ行くでしょう。別な事件、別な国、別な法規、別な人間的物語、私は率直に過酷な現場で仕事を続けることでしょう」

「現場には行く」とマリは言っています。ただ、まだ気持ちの整理がついていないということで、シリアには行きたくないということをおっしゃっていました。

先ほど申しましたように、ジルが仕事をしていたのはフランスのテレビ局です。ここで、彼は社員として戦場に赴いたわけですが、彼の死を受けて、そのフランスのテレビ局は、ジル・ジャキエ・スタジオと、彼を忘れないということでスタジオに彼の名前をつけました。

この仕事をしなければ民主主義が消滅する

このときジルと一緒にいたカメラマンがもう一人います。彼はクリストフ・カンク、このテレビ局のカメラマンです。ジルがリポーターをやっていて、クリストフがカメラを回すという形で取材を行っていました。ジルが砲撃を受けたときは、2人が離ればなれになっていたようです。彼も破片を背中に受けて治療中です。クリストフにも同じような質問をしました。ちょっと角度を変えたのですが、僕が質問するのですが、われわれジャーナリストは命をかけて、命を捨てても伝えなくてはいけないものがあるのでしょうか。聞いてみました。彼はこう答えました。

「それは難しい質問です。しかし、私はこの仕事で起きたことを伝えていかなくてはならないと思っています。そうしなければ言論の自由

が消滅してしまいます。独裁者がシリアでいま起きているように横行し、市民を虐殺するでしょう。ですから、私たちは伝えなくてはならないのです」

この仕事は必要な仕事かどうか聞いてみました。

「この仕事は、絶対に必要です。圧政に対する反対勢力ですから、この仕事がなくなれば、圧政が横行するでしょう。そして民主主義が消滅するでしょう。真実に光を当て、残虐で独裁的な指導者たちがしていることを知らしめるために。彼らがしていることは間違いだ。なぜなら市民を虐殺しているからです。ですから、それを伝えるために私たちがいるのです。もし私たちにそれを伝えないようにするのなら、それは悪事への道を開くことになるでしょう」

僕が言っているのではないです。こうした記者たちの信念です。

われわれの仕事で、こういった紛争であるとか戦争をとめられることができるのでしょうかという質問もしてみました。

「率直に言って深く確信しています、とめられると。アウン・サン・スー・チーがビルマに存在しているのは偶然ではなく、それは、半分はジャーナリストや、半分は各国からの圧力があつたからです。結果として軍事政権側は彼女に圧力を加えることをやめ、彼女はいまや民主的に存在しています」

皆さんもご存じのように、スー・チーさんは国外に出ていろいろな政治活動をなさっているわけで、それは彼が言うには、半分は自分たちが伝えたからそういうことになっているのだと。つまりは自分たちは、抑圧であるとかそういったものを少しでもとめられることができる、というのが彼の確信です。さらにクリストフに聞きました。「またシリアに行きますか」。

「私は再びシリアに行きます。なぜなら、私にとって、私の事件は終わっていないからです」と、彼は答えました。

人びとは犯罪や戦争の目撃者を求めている

今度はロンドンに飛びました。隻眼の女性記者、マリー・コルビンの同僚取材しました。

2012年2月、反政府側がつくったホムスにあ

る外国人記者の拠点であるメディアセンターが政府軍側にねらわれました。マリーは、直撃弾を受け亡くなりました。もう一人記者が死んでいます。そのときにマリーと一緒に組んで取材をしていたサンデータイムスのカメラマン、ポール・コンロイさんに会いました。彼も足と腎臓付近に砲弾を食らって、現在もリハビリを行っています。マリーが何を伝えたかったのということを知っていました。

「マリーは、無実の子ども、女性、一般市民が殺されていることを見ごぞせなかったのです。彼女は取材を始め、全世界にこの惨劇を知らしめようとしたのです。発信すること、真実を伝えることがジャーナリストの使命だからです」と言っていたそうです。

マリーとポールは、いつもこういった話をしていたそうです。当然、ポール自身もジャーナリストとしての心構え、考え方がありました。マリーはまた「報道で真実に光を与えることにより圧力をかけ、当事者双方を冷静にさせ、紛争、殺りくをやめさせようとしたのだと思います」と、語っていたそうです。

ポールは自身の考え方としてこう言っています。

「ジャーナリストとしてやらなければならないと思っています。メディアの存在は不可欠です。われわれは世界の暗闇に光を当てなければなりません。戦争をやめさせることはできなくても、最悪の事態になることは避けることはできるのです。ジャーナリストの死によって取材が行われなくなるようなことがあってはならないと思います。ジャーナリストはとても重要な仕事です。マリーの死や私のけがは、とても悲しくつらいことですが、われわれはひるむことなく引き続き取材を行うべきなのです。人々はいまでも犯罪、戦争を目撃してくれる人を求めています」

シリアで同僚を失ったり、みずからけがをしたり、夫を亡くしたり、そうした記者に話を聞いてまいりました。われわれはどちらかというと常日ごろ、同僚の記者であるとか、外国の記者と会って話したときに、「何でこの仕事を選

んだのか」「どういう志があるのか」なんていうことは、もし聞いても何も答えてくれません。今回は非常に特別だったと僕は感じています。つまり、僕自身が自分の同僚、パートナーを失ったことを彼らはよく知っていたものですから、自分たちのことも素直に語ってくれたということだと思います。

我々は理想だとか信念だとか、そういったものは胸のどこかにしまって、淡々と事実、その背景、それを伝えるのが仕事だと思ってやってきましたし、今後もそういった形でやっていきます。

外国人の記者の目が抑止力になる

日本に帰ってきて、事務所に机を並べているのですが、ちょっと美香の机とは離れています。ふだん彼女の机の上だとかそんなことはつぶさにみたことがありませんでした。帰ってきて彼女の机の上に黄色いポストイットが貼ってあるのをみつけました。そこに文字が書かれていました。外国人記者、その目が抑止力になるといったようなことが書かれていました。

彼女の頭の中では、常にジャーナリストというのはどういう仕事であるのか、自分は何をすべきであるのか、僕と違って常にそういうことを考えていたのだと思います。

シリアで彼女を亡くしたわけですが、こういった多くのジャーナリスト、その志、そういったものに触れて、勇気をもらったとかそんなことではなくて、我々が常日ごろ思っていたことが間違いではなかったということを確認した取材でありました。今後も、山本はいないのだけれども、僕自身はまだまだ現場に行くつもりでおります。この間もイラク戦争10年の取材に行っていました。

僕が彼女と出会って取材を始めたのが17年前。17年間、アフガンだとか、チェチェンだとか、ウガンダ、イラク、インドネシアのアチェ解放戦線、いろいろなところを回ってきました。僕は彼女のいろいろなさまざまな思い出があります。去年、トルコからシリアに向かうときに、国境近くの飛行場におりました。トルコ側です。

タクシーを拾って、僕たちは後ろに乗っていたのですが。そのときに山本美香が、ふだんは現場では佐藤・山本と呼んでいるのですけれども、通常は、美香は「かずさん」と呼んでいます。和孝ですから。突然、「かずさん、私たち100歳超えたね」「えっ?」。僕はそのとき56歳で、あいつが45歳。「ああ、そうか、100歳超えたか。そうだよねえ」というだけで話は終わったのですけれども、何が言いたかったのかなど。長くここまで一緒にやってきたね。まだこれからも一緒にやろうか。ものすごく暑い午後で、道路の周りにはオリーブの畑がパーッと連なっていて、「じゃあ2人でどこか映画でも安くみられるのかね」くらいの話で終わったのですが、こういう事件があつて、自分にとっては非常に印象的な言葉です。

非常に取りとめのない話で、何をどうお伝えしていいのか。山本美香がいただいた賞ですから、本来ここで私がしゃべっているのは、自分自身は若干の違和感を持っております。しかし、逆の立場であつても彼女はやったでしょう。

生前、家で2人有的时候に、あいつが妙なことを言い出して、「私はかずさんのつきまといだから、私が死んでもずっとつきまとうわよ」「いいよ、勝手にしろよ」。いま、そんな状態になっていまして、非常に僕にとっては、自分の中でその存在というのがどんどん大きくなっていくような……。

先ほど小山さんのお話の中で、最愛の人を失ったときに人間というのは成長するのだと、たしかそんなことをおっしゃられたと思うのですが、その最愛の人——生きてるときというのは、どちらかというと日常化しているものですからそんなに考えないのですが、ものすごく小山さんがおっしゃっていることがよくわかって、この存在というのはますます自分の中では大きくなっていくのかなど。

先ほど、成長するというふうにおっしゃられましたけれども、自分が成長するかどうかは置いておきまして、自分がこういった事件というか、現場で同僚、部下、パートナーを——僕は現場での指揮官ですから、安全管理には十分気をつけていたつもりですが、それを失ってしまったことを、どうやって自分は今後何に役立て

ていかなければならないのかな、というふうには考えております。

ジャーナリズムの中で山本美香は生き続ける

その中で、去年、山本美香記念財団というのをつくりまして、山本美香国際記者賞というものをつくって、今後続いてくる若い記者であるとか、すぐれた国際報道をした方にそれをもらっていただきたい、それが山本美香の気持ちを少しでもなだめることができるのかなど。また、そういったもので山本美香を生き続けさせてやることができるのかなど。僕もその中で一緒にまだ生きていくことができるのかなど。

今回こういった賞をいただきまして、日本のジャーナリズムの中で山本美香の名前が今後も生きていくということを自分としては非常にうれしく感じております。

締め言葉がなかなかみつからないのですが、今後もひるむことなく、僕は現場で取材を続けたいと思っています。

<質疑応答>

質問 小山さんは文芸記者として初めての受賞ということですが、略歴を拝見すると、ずっと現場にいたというわけではない。大阪支社の文化部長として出られたり、編集委員では漫画の担当とか、必ずしも文芸ばかりではない。ある意味ではサラリーマンというか、新聞記者の場合でも、異動で自分の専門が生かせなくなるとか、そういう中でちょっと気弱になって続けることがなかなかできない人がいます。それでもなおかつ小山さんがこの仕事を通してこれたのは、どのあたりにあるのか、お伺いできればと思います。

小山 何でも楽しんじゃうというところがあるかもしれません。僕は99年に大阪文化部長に異動を命じられて関西に行きました。大阪文化部長というのは、部長兼デスク兼ファクス交換、鉛筆削り、全部やらなくてはいけない。電

話とりもやらなければいけない。部下の記者は2人です。おそらく共同通信で一番小さな部で、それはそれでとても楽しかったのですが、文学担当記者だったことに関係することであると、出版資本というものは東京に99%ぐらいがあるのかと思います。正確な数字がわかっているわけではありませんが…。ここに関西の方がいらっしやたらちょっと失礼ですが、関西に大きな出版社がいくつもあるわけではありません。東京では文学賞のパーティーがたくさん開かれていて、そういうパーティーで会うような人たちのことが、当時僕が使っていた電子手帳には何千人と入っていて、この人間関係が全部切れてしまうのは本当に寂しい気持ちでした。

僕はたくさんの、本当に毎日のようにインタビューをしてきましたし、その取材相手に対して、すばらしいですねとか、あそこがよかったとか、僕は本当にあそこ大好きだなとか言ってきて、その一つ一つはうそではないのけれども、でも、本当に自分の心はどこにあるのかということは、かなり前のめりに仕事をしてきたので、あまり考えないで仕事をしてきたところもあったかもしれません。

大阪時代に本と向き合ったことが今に…

ですから、異動が決まってしばらくすると、関西に異動して文学関係の人たちにあまり会わなくなると、本とだけ向かい合うというのは、もしかしたらチャンスだなと思いました。500冊ほどですが、自分が気になっていた本を持って行って、それらを大阪勤務時代の3年の間に全部読み返しました。その結果、自分がどういうものが好きで、どういうものを現代の文学と考えているのかということが非常によくわかりましたし、特に村上春樹さんが日本近代のことをずっと考えているのだということも、そのときわかりました。

文学賞のパーティーなどが頻繁にある環境から離れることは、確かに文芸担当記者としてはマイナスだったのけれども、その環境から一度離れたことが、結果的には、いまの仕事につながっています。

世相漫画担当がきっかけで白川ワールドへ

ちょっと長い答えになってすみませんが、その大阪から、編集委員室の編集委員という記者を希望して本社に戻ってきました。でも世の中って、そううまくはいかないもので、村上春樹さんのことを書きたいと思っていたら、命じられたのは世相漫画の担当でした。ここに漫画家の方がいたら申しわけないのですが、正直、漫画担当かと思って、ちょっと力が抜けて…。

でも、漫画家たちに教えてもらったのですが、考えてみると、世相漫画というのは日本の新聞が始まったころ以来のジャンルです。日本の新聞の中で一番古いジャンルの一つではないかと思います。そういうジャンルの担当になったということでした。

それから漫画家というのはすばらしい才能の持ち主たちで、彼らと一緒に仕事をしている中で非常に刺激を受けました。なぜならば、言葉を使わないで世の中の喜怒哀楽を一つの絵だけで示すのです。それだけで、社会世相を切っていくという仕事は大変なことで、僕が知らなかったただけだなあと思いました。

その漫画家たちに刺激されてやったのが、僕の好きな白川静さんの文字学を漫画的なイラストを使って、一般の読者の方にわかりやすく伝えていくという仕事です。世の中ってわからないもので、それがこの賞に結びついたという側面もあるので、本当によくわからない。でも基本的には何でも、どんな小さなところでも、記者が果たすべき役割の場所はちゃんとあるということが僕の思いです。

質問 出版社に勤めております。小山さんにお聞きしたいのですが、今回の『多崎つくる……』、先ほどの色の関係で赤と青と白と黒が出てきますね。その意味合いというのはどういう解釈をされているかお聞きしたいです。

小山 細かい質問が出ましたね。読んでいない人には悪いですが、今度の新作の中でのアオとアカは完全な色だと思います。シロとクロは、

僕は完全な色ではなくて、灰田という人間も出てきますけれども、2人が合わさったような、ペアを組んだような色だと僕は思っています。アオとアカは非常にはっきりした、世俗的な色として機能していて、シロとクロは混じりぐあいによって灰色になったり、闇の色になったりするのです。さっき言った世界で言うところの直子的な、闇の色になっていくわけですが、終盤の方で、アオとアカはあのままでいいよねという言葉はクロという女性が言う場面があります。だから明らかにあの色は全部並列的ではありません。一番重要な色は実際にはシロとクロで、それは混ぜ方によっては闇の色であるし、というふうに思っています。そんなところです。

質問 小山さんは村上春樹さんと年齢が一緒だったと思うのですが、春樹さんはなかなか取材するのが大変で、先ほども井伏鱒二さんに何回も断られたという話がありましたけれども、どんな作家でも、すべてうまくいくわけではないし、特に春樹さんの場合にはなかなか取材するのは大変だとは思いますが、どのあたりで、何回もできたのか、あと今回の受賞について春樹さんに伝えたり、メールでやりとりしたとか、そんなことがあったらお聞きしたいです。

佐藤さんにお伺いしたいことがあります。先ほどのお話で戦場の現場を目の当たりにしながら歩いていく中で、取材をすることの大切さなど、いろいろな思いで伝わってきました。人間には恐怖心があると思うのです。戦場に行くときに人間としてのご自身なりの防衛方針とか、それをどんなふうに克服されてやっているのかということをお伺いしたい。

佐藤 自分にはあたらないと思っています。自分には弾はあたらないと思っています。

例えば、目の前が地雷源であるという話を聞いたときに、その案内人がこうやって歩いていくのだけれども、それをトレースするように歩いてこいと。それで歩けるかどうか。それは恐怖ですよ。もしかしたら、ないかもしれないし、あるかもしれない。でも、そのときは、自

分は踏まないと思うしか前に進むことはできません。踏むと思ったら一歩も足は動きません。そこから、自分たちの危険な地域から安全地帯に行かなければならない、そのときにはどうするかですね。どう思うか。僕は踏まないと思っているし、あたらないと思っています。

小山 村上春樹さんに最初にインタビューしたのは1985年で、当時も決して、インタビュー好きではなかったですね。特に最初から写真はあまり好きではなくて、数枚撮ったら、もうやめてくれないかとか言っていましたから、いまのようにやはり写真は嫌いというのは、そのままだなと思います。

ただ、こんなこと言ったら済みませんが、村上春樹さんに。そんなにまだ世界的に売れた作家だからというのではなくて、純粹に読んで、会いに行きたいと思って。非常に特徴的な作品だったので、新しい。村上さんの一つの作品の特徴は、僕が自分で呼んでいるのですが、“ブーメラン的世界”というか、相手にこうだと追及したことが、グルッと回って自分を同じ問題で追及するというふうにして問題が進んでいくのです。はっきりそういう形を持った作家としては初めてでした。だからこの人に会いたいと思って会って……。

それから、最初に会ったときに、一つだけ、最後の場面のところですが、この他にも終わり方があるかもしれない…という話になって、たまたま、その後、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』が谷崎潤一郎賞をもらったのですが、この賞をもらったときに、その部分だけ聞きたいと思って、もう1度インタビューをお願いしました。村上さんがそのときは会社に来てくださいました。実はあの場面は何通りも書き直したところで…と。いまは『村上春樹全作品』に、その終わり方の可能性のパターンが全部示されていますが。終わり方のあり得るパターンをそのとき全部話してくれました。こういう終わり方、こういう終わり方、こういう終わり方…という、何通りかの可能性がある、と。ああ、そうかと思いました。

だから、そのとき正直にちょっと聞いたことが、ある意味では村上さんが結構苦労したところだったのではないのかなと思いました。まだ比較的若かったからかもしれませんが、そういう率直な質問ができた。

ご自宅に電話をかけると、「いま、スパゲッティをゆでていますから10分後にしてください」なんていう、まるで村上作品を読んでいるような応答もあつたりして（笑）、そういう時代もありました。

質問 佐藤さんにお聞きします。日本にも戦場があると思います。というのは、福島が収束宣言は出されたけれども、現状としてはいろいろな、汚染水の問題というようなことではなくて、根本的な、何によって引き起こされたかというような、原発の事故の原因究明すらできていないというようなことで、その点から考えると、日本の中にも大きな福島の戦場があると思っていますけれども、佐藤さんとしてはいかがでしょうか。

佐藤 戦争というのは不条理ですよ、福島も不条理ですよ。それを、山本美香はそこに飛び込んでいって、まさに取材活動を始めたときであって、もし生きていれば、それをずっと長期にわたって取材する覚悟を持ってやっていました。日本に戦場があるというのも考えていました。

質問 小山さんにお聞きします。村上文学の中に白川文字学が散りばめられているということを気づいたのはどの作品だったのかということと、もう少し白川文字学について触れていただきたいと思います。

村上作品に散りばめられている白川文字学

小山 もしかしたら白川文字学が散りばめられているのかもしれないということを考え始めた作品は、先ほど紹介した『アフターダーク』です。そして『スプートニクの恋人』です。

また『1Q84』の冒頭にも白川文字学と関係しているのではないかと思える部分があります。例えば「水に放り込んで、浮かぶか沈むか見てみろ。そういうことか?」「簡単にいえば」。これは、ふかえりという少女作家をデビューさせるかどうか、どうしようかということを、天吾と編集者の者が話している会話なのですが、皆さん、これをどう読まれましたか。

これは水占という、中国にある、紀元200年ぐらいの『博物志』という中にも出てきますけれども、中国では子どもを水に浮かべて川に流して、浮かんだら育てる、沈んだら育てないというような俗があって、記録にいくつか残っています。たぶんそのことを論議していて、そのことを両者が了解し合っている会話です。

これは殷の王朝を倒した周王朝の伝説上の始祖、后稷についてのことなのかもしれません。后稷は、最初は町の中に捨てられ、次に森の中に捨てられ、次に氷の上に捨てられるのかな…。そのたびに奇瑞が起きて助かって王様になるのですけれども。そのために、后稷は名が「棄」という字です。そして「棄」という字の古い文字は、籠みたいなものの中に子どもが入れられていて、その周りに点々が打ってあります。点々は水滴です。これは、川に流して子どもを浮かぶか沈むかをみている字なのですけれども、たぶん、こんなことを前提に『1Q84』の冒頭、立ち上がりの部分に、そういうことが書かれているのではないかと思います。

白川静さんの文字学で一番重要なことは「口」という字形が、顔にある「くち」のことではなく、神様へのお祈りの言葉を入れる箱の形だと指摘したことです。それを発見したことが、白川静さんの最大の業績と言われています。

例えば「右」という字の下にある「口」の字形も、神様へのお祈りの言葉を入れる箱の形です。その箱を右手で持つのです。お祈りの箱を持つ手が右手なので「右」が「みぎ」という意味なのです。これが白川文字学のすべての出発点と言っていいものです。

そのことが『1Q84』の重要な場面で出てきます。天吾という主人公が、ふかえりという

美少女作家と出会う場面です。天吾はふかえりをみると頭がクラクラして、魅力的で、どうしようもなくなってしまうのです。でも、それは恋心とか、性的なものではなくて、天吾の中にもともとあったもので、彼女がそれを照らし出したのだというふうに書いてあります。

その2ページぐらい後に「天吾は両手で、空中にある架空の箱を支えるようなかつこうをした。とくに意味のない動作だったが」というのがありますが、この部分に白川静さんの文字学をそのまま当てはめると、これは「兄」という字です。架空の箱（神様にお祈りの言葉を入れる箱）を捧げている人を横から見た文字の形が「兄」です。天吾がふかえりの兄だとすると、『1Q84』の多くの問題が受け取れるというか…、これは小山の妄想ですけれども。妄想、空想ですが、ここの場面に白川静さんの文字学を当てはめることが可能だとすれば、架空の箱を持つ格好をするというのは、文字学上では「兄」のことなのです。多分、僕はそうではないかと妄想しております。

司会 ありがとうございます。これで終わりにしたいと思います。小山さんが文芸記者の仕事は人に会うことに情熱を傾けることだとおっしゃっていましたが、小山さんのフィールドは文学と、片や佐藤さん、山本さんは戦地というか極限状況にいる人々に会いに行くということです。やはりお二人の、そういう意味では、とにかく現場に行くということで、ジャーナリズムを人に伝える仕事の一番大事なところを続けていらっしゃるし、これからずっとそういう仕事をなさっていかれるのだと思います。きょうは本当にありがとうございました。

(文責・編集部)